

山の気象シンポジウム報告

6月15日(土)13時から気象庁第一会議室にて上記の月例会が開かれた。当日の演題およびその要旨は次の通り。

1. ヨーロッパ、アルプスの気象

飯田睦次郎(気研)

ユングフラウヨッホ観測所(3,572m, メンヒとアイガーの鞍部にある)の1973年7月~1974年8月の観測資料および1973年ヨーロッパアルプスの山々を訪ねた経験からいうと、ヨーロッパアルプスでは北から寒冷前線が下りてくるとき、低気圧が沿岸で何日も停滞するブロッキング現象による悪天に気をつけねばよい。又ヨーロッパの山での事故は吹雪のあと、岩についた氷がとけてそのための転落事故が多い。

2. 山での高温による事故について

宮内 駿一(気象協会)

夏型の気圧配置とくに地上で鯨の尾型になると好天がつづく。しかしこの型になるとあまり天気がよいので山では日射病にかか人がある。昭和48年7月14~15日丹沢で高校生が死亡した事故も日射病によるものであった。この日の上層天気図をみると、地上から300mbまで高気圧の範囲内にあり、しかも850mbでも300mbでも高気圧の所がwarmとなっており、またエマグラムでも1,000m以上が温度が高く、全層にわたって下降昇温を示していた。

3. 雪渓の変態にともなう登山者の危険

小岩 清水(専修大付属高校)

近年越後巻機山割引(ワリメキ)谷雪渓の調査をつづけている。この雪渓は登山路として一般に多く利用されているが、5~7月にかけては雪渓は融解しつつ変化している。みていると100名中95名までが、雪渓の最低鞍部にあたる歩き易い踏跡をそのまま通っている。しかしそこは主水脈の真上に当りもっとも早く陥没しやすい場所である。6月中ばすぎきて危険になったら積雪量からみてもっとも安全な雪渓の最低鞍部より雪渓の側壁寄の傾斜した所を歩くなど、雪渓の状況に応じた登路を考えてほしい。

4. 万年雪地帯の積雪航空測量について

土屋 巖(気研)

吹きだまり型の万年雪は、多雪山地の南又は南東斜面

に発現する例が多いが、その雪の堆積の最大深度の測定は困難なことが多い。鳥海山、月山、飯豊山地区について、精密な地形図(1/10,000)を作り、多雪季の航空写真によって同様の積雪地形図を作ると、両者の高度差によって積雪深が求められる。1,400~1,800m高度のいくつかの万年雪は30m以上の雪の堆積が降雪季節の終りにあってはじめて越年するとみられるが、中には50mに達するものもあった。これは1973~1974年豪雪の結果であって、1975年への越年量はかなり多いとみられる。

5. アラスカ、ポナ峰登頂時の気象変化について

北原 由昭(気象庁)

昭和49年4月29日~5月16日にかけて気象庁山岳部はアラスカ・セントエライアス山塊のポナ峰に行き、その登頂に成功した。この山の位置はアラスカ南岸に位置するためか、その間の気象変化をみると、アリューシャン東部で低気圧が閉塞し、閉塞前線が南から北上してくる形のとときに悪天が現われ、北から下りてくる悪天はなかった。

6. 霧ヶ峰の天気(霧)について

和田光明(新日本海洋KK)

昭和20年7、8月の霧ヶ峰測候所と諏訪測候所の資料をもとにして、霧ヶ峰の天気、とくに霧について調べてみた。その結果、一般に山岳地域では午後に霧がみられるのが普通なのに、当地では日没後から午前中にかけて霧がみられ、午後は全く霧がみられず視程のよいことがわかった。

7. 山岳地の気流(3) 吉川 友章(環境庁)

気流を非発散項を含む運動方程式の解として求め、地形の起伏、安定度の効果を加え、三次元で表現した。又非線型項を省いて簡略化した場合や、パイバル風を入力として、山岳上の気流を推算する例も述べられた。

8. 富士山麓の気象特性 三寺 光雄(気研)

富士山麓の高度ごとの何点かの観測値から、雨量分布の特性をみてみた。その結果、月によって違い、月雨量最大値は低地で6月、300m以上の高い所で8月が多く、日雨量でみると、低地6月、高い所で7月とずれて現われていた。

9. 遠見尾根の雪崩 広瀬 潔(日本山岳会)

昭和49年2月9日遠見尾根で大きな雪崩が起り、一べんに四つのリフトが壊された。このときの天気図をみる

と、低気圧が四国沖にあり、副低気圧がその後、能登半島沖に発生東進した型。現地では長方形の結晶をした雪が降り、約10cm積った。風が北に変わったとき北側の尾根の鞍部から風が突風となって吹きつけ、不安定積雪層を刺激して雪崩となったのではないかと思う。問題はこんな雪崩の起り易い所にスキー場を作ったことだ。

10. 富士山の雲の分類について

大井 正一、故曲田光夫、故山本三郎（気研）

山本君が選んだ20種類の典型的な富士山の雲の写真と、曲田さんが行った数値実験とを組合せて、それらの

場合の館野の高層資料および地上、上層天気図を比べながら、雨の発生機構についての考察を行った。

11. 富士山の笠雲の隆起（こぶ）について

湯山 生（三宅島側）

富士山の笠雲をいくつか撮影していると、そこに珍しい形の隆起（こぶ）がみられることがある。しかしこれが地形によって起るものか、気流のうずによって起るものかは分らない。

（文責 奥山）

第18期第2回常任理事会議事録

日時 昭和49年9月9日（月）14.00～17.00

場所 気象庁観測部会議室

出席者 磯野、小平、朝倉、大井、奥田、河村、高橋、野本、二宮、丸山、各常任理事
川村、三谷、各理事

報告

〔庶務〕

昭和50年秋季大会は関西支部担当とし、予定期日は、昭和50年10月29日～31日、会場は大阪科学技術センター（3会場）を予定している。

大会は、大阪管区気象台研究会および日本気象学会関西支部50年度年会とを共催したい。

〔集誌〕

No. 4 から編集、校正を外注に切り替えた。

〔長期計画〕

委員会を開き今後具体的にどのようなものを取上げて行くかについて検討した。

いろいろな意見が発表されたが、主なものは次のとおり。

- (1) 大気物理研究所は別に考える。
- (2) 基礎研究
- (3) 新制大学における気象学、地学のカリキュラム
- (4) 土木、建築工学等境界領域についての検討
- (5) 気象学発展の長期展望

議題

1. 学会奨励金受領候補について

次の3件を適当と認め、全理事にその可否について投票を依頼する。

予報へのレーダー利用について。

矢野兼三（福岡管区気象台）

季節風による長野県の大雪について。

内山文夫（長野地方気象台）

北陸に集中豪雨をもたらす帯状エコー。

植間道夫（新潟地方気象台）

2. 「第12回理工学における同位元素研究発表会」の共同主催について

共同主催を承認する。

3. 委員会委員の委嘱について

次の候補者を適当と認め、全理事に審査をお願いする。

荒川正一（気象大学校） 田中豊顕（気象研究所）

椎野純一（気象研究所） 高橋忠司（埼玉大学）

島貫 陸（東帝学芸大学） 村山信彦（気象研究所）

関根正幸（気象庁測候課）

4. 理事よりの要望事項について

各担当理事が検討し次回までに原案を作成する。

(1) 学会運営の長期計画の作成 } 庶務理事

(2) 事務局を研究所へ移転 }

(3) 予稿集の廃止 }

(4) 大会開催をなるべく大学が責任を持つこと } 講演

企画理事

(5) 会計への布石 }

(6) 各分野の予算使用状況監査 } 会計理事

5. 外国会員の会費請求額について

次回に審議する

6. 「気象学用語集」の刊行について

(1) 今回のものは、50年3月刊行に間に合うよう進める。

(2) それまでに間に合う意見があれば入れる。

(3) 問題のある用語については「天気」「研究ノート」等に紙上討論により全会員の意見を求め将来の改訂に備える。新語についても常に監視を続けて行く。

(4) 他の用語集と同様に5年後位には改訂版を出す。

(5) 今回の原案をコピーして、旧帝大、名大、気象庁技術部門に配付する。

7. 科学研究費補助金審査委員候補者について

第1段審査委員候補者 浅井富雄（東大海洋研）

田中正之（東北大）

第2段審査委員候補者 沢田竜吉（九州大学）を推薦する。

8. 気象百年史の委託販売について

気象庁から要望された販売を引受ける方向で細部について気象庁と打合せ。

9. 各種委員会委員候補者審査に関する各理事の質問、意見に対する処理については各関係担当理事がそれぞれ処理する。

承認事項：玉城善伸ほか8名の入会を承認